

留学生におくる令和のころ (3)

コロナの夏、日本の夏

令和 2 年 8 月
JaLSA 日本文化研究員

お盆の時期に出かけない日本人

日本人にとってお盆休みというのは、何にも代え難い楽しみです。江戸時代、江戸や京都が発展して多くの商業人が必要になり、一方で、農村部において田畑を兄弟全員に分割して相続させることができない状況の中、多くの子供たちが江戸の町に「丁稚奉公」でやってきていました。丁稚奉公とは、幼い時から親元を離れ、江戸などで住み込みで働くことです。仕事を学業に変えて考えれば、今の留学生と同じです。

留学生の皆さんならば自分のことと重ね合わせて考えていただければわかると思いますが、何かつらいことがあったとき、またはうれしいことがあったとき、進路などで自分が悩んでいるとき、江戸時代の丁稚も、田舎の両親や親族に会って話をしたいと思っていました。現代ならば電話もありますし、インターネットで顔を見ることもできます。しかし、今から 200 年くらい前の江戸時代では、電話やネットのような便利な道具もありません。しかしもしあったとしても、電話などではなく、やはり本当に会って顔を合わせて話をしたいものです。

そのような丁稚の人々は、年に二回、お正月とお盆だけは、休みを取って実家に帰ることが許されてきました。また、^{おおだな}大店の旦那などは、旅費やお土産などを用意してくれる人もあったので、

非常にうれしかったといます。現在でも、あまりにもうれしいことがあったときに「盆と正月がいつぺんに来たよう」などという表現をする人がいます。短い時間でも普段の忙しい生活を離れ、自分の仕事先の話をお土産にしながら家族と会えるということが、どれくらいうれしいことだったのでしょうか。それがこのような表現にも表れているのです。

さて、今年はコロナウイルス禍があって、留学生の皆さんもそうだと思いますが、日本の国内でも、東京に出てきた人が地方にある実家に帰ることができないという現象が起きています。日本ではお盆というのは、先祖の霊が家に戻ってくるので、その霊を家族そろって家に招き一緒に過ごすという、大事な風習です。最近では、そのような風習からではなく単純に長期休暇を利用して観光旅行をする人も少なくありませんが、それでもその風習がなくなっただけではありません。それにもかかわらずこの夏は、田舎の実家に帰らずに、東京や大阪などの都会に残る人が少なくありません。なおかつ都会や自宅の近くで遊ぶわけでもなく、家でじっとしています。日本政府は「Go To トラベルキャンペーン」を行い、十分に気をつけながら帰省などを行うように促していますが、国民にほとんどそのような動きはありません。これは日本人の国民性から見えることなのです。

「不安定」を恐れる日本人

日本人に限らず、人間は不安定な状況を最も恐ろしく思います。皆さんの中にも、お寺などに観光で行ったことがある人がいると思います。その時に、「畳の縁よちに座ってはいけません」とか

「敷居を踏んではいけません」などと注意された経験がある人がいるのではないのでしょうか。これは「境目」つまり「間」に身を置いてしまうと、「魔」に魅入られるというように信じられているからなのです。

例えば、もっとも幽霊に魅入られる時間帯は「夕方」であるとされています。夕方はちょうど「昼＝生きているものの世界」と「夜＝死せるものの世界」の間として、生きる者と死せる者が交差する場所であるとされています。同じように「老人」とか「河原」などもそのような境界線上です。ですから「夕方に老人が一人で河原にいて、理由もなく笑っている」というと、笑っているのに危険を感じるというようになるのです。このような時に、その老人に向かって「孫」つまり「生命力にあふれる者」が駆け寄ってくると、急に安定するようになります。

この「夕方」が最も怖いというのは、日本だけではなくアメリカでも同じで、1959年から「トワイライト・ゾーン」という超常現象や幽霊を扱ったドラマが作られていましたし、1983年には同名の映画もあったほどです。

日本では「夕方」の怪談が非常に多く、『今昔物語集』などに掲載されている幽霊は、実は深夜よりも夕方の方が多いのです。深夜は基本的には寝ている人が多いので、幽霊に遭遇することは少なかったということになるのかもしれませんが。

室町時代に「百鬼夜行」というように、深夜に鬼が歩くという概念が出来上がってから、本日と明日の境目で、夜中である「丑三つ時^{どき}*」に幽霊が出るという話が多くなっていくのです。その頃になると「灯り」の技術も進みまた、夜中に活動する人も増え

てきたということもありますし、物語もさまざまに発展し、幽霊だけではなく鬼や妖怪の概念が徐々に広まってきたということなのです。

さて、話を戻しましょう。人間は「先行きがどうなるか」ということが大きな不安になり、恐怖を感じます。不安定な状況になると、頭の中でさまざまな選択肢を考えます。この選択肢というのは、人間は悲観的な生き物ですので、基本的には悪い方になってしまうのです。不安定という状況が人間の頭の中を恐慌状態にしてしまい、そのことから冷静に判断できなくなってしまうのですね。上記の河原の老人のように、孫のような絶対的な存在があれば安心できるのですが、それが思い浮かばない場合に人間は不安が大きくなってしまっパニックを起こすのです。そしてそのパニックは何でもない人のところにも伝染してしまい、集団ヒステリーが起きることになります。

実際はそんなことにはならないというのは、誰もがわかっているのですが、その恐慌状態の時には冷静な判断がなくなってしまうのです。日本には「案ずるよりも生むが易し」、つまり悩んでいるときはどうしても不安で押しつぶされそうになるが、実際にやってみると悩んでいるときよりもはるかに簡単にうまくゆくことが多いという感覚がありますし、また「喉元過ぎれば熱さを忘れる」という言葉もあります。つまり、苦しいことも済んでしまえば、後は何事もなかったように過ごしてしまうことができるということです。このような素晴らしい言葉があるのに、日本人は何か不安なことがあると、また、不安定な状況を煽られるとそれに乗って、恐慌状態を起こしてしまうのです。

コロナウイルス禍の中の日本というのは、まさにそのような状況ではないでしょうか。

恐慌状態と「間」

さて、ではこのような恐慌状態を、人々はこれまでどのように克服してきたのでしょうか。

まず、上記の「老人が夕方河原にいる」という例を考えてみましょう。上記のように、孫、つまり安定した存在が入ることによって不安定さが解消され、パニックは収まることになります。例えば、映画『タイタニック』の中でも、広間に残された人が絶体絶命な状態になります。しかし、その時に船長という最も経験のある権威ある存在が「この船は沈みません」ということを宣言することによって、船が転覆しているにもかかわらず、中のパニックが収まるのです。これが人間です。

日本では、鎌倉時代に疫病が流行しますが、その流行の中で新しい仏教が生まれることになります。法華経ほけきょうや時宗じしゅうなどは、念仏を唱えることによって極楽に行くことができるとして民衆の間で流行し、そのことからパニックが少なくなったということになります。現在でもベラルーシやスウェーデンなど、国家のトップが安心するように言うことによって、落ち着いている国は少なくありません。そのことが正しいかどうかは別にして、人間はパニックの中にいて周囲の人を信用できなくなるよりは、一緒に念仏を唱えたり、普通の生活をしたりしている方がよいのではないかという考え方もあるのかもしれませんが。

また、日本の場合は「間」を大事にするという考え方があります。先ほども述べたとおり畳の縁を踏んではいけないとか、敷居を踏んではいけないというように、「間」には「魔」に引き込まれるということがあります。しかし、その「間」をうまく使えば、これほど素晴らしいことはないというのも日本人の知恵なのです。

実際に、歌舞伎を見に行くと「睨^{にら}み」というものがあります。一定のポーズをとって、観客席の方を見るポーズです。この時は演技は止まっているのですから、完全に「間」でしかありません。この「間」が短ければ「間抜け」になってしまいますし、また長すぎれば「間延び」してしまいます。しかし、この「間」が絶妙であれば素晴らしい演技となるのです。

歌舞伎だけではありません。茶道の「詫^わび・寂^さび」もそうですし、また書院造^{しょいんづくり}の借景^{しやくけい}などの作り方も「間」をうまく使ったものであることは間違いがありません。日本人は「間」をうまく使うことで、一呼吸おいてゆっくりと物事を落ち着いて考えることができ、その中でさまざまな次の展開を考えられるのです。

コロナウイルス禍の日本の現状を見ると、今まで忙しすぎた日本人の多くが「間」を忘れてしまい、いつの間にか「間抜け」になっていたのではないかという気がします。留学生の皆さんも、日本にいて現在のようにどこにも行けない時に、ぜひ「間」を学んでみてはいかがでしょうか。

【編集注】

* 丑三つ時：現在の午前 2 時～2 時 30 分ころ。